

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 勝原 菜温子

王権・宗教・家・恋・性差等々の要素が織りなす文化的規範体系は、物語世界を形成する文化史的コンテクストであると同時に、文学の批評的な想像力は、物語の創作を通して、典雅な王朝の文化的規範の表層下に隠された抑圧や排除、管理の構造を探り当て、それを相対化するものでもある。本論文は、『源氏物語』を頂点とする王朝物語の創作が、まさにそのような文学的営為であったことを克明に浮かび上がらせたものである。論文の構成は大きく三部に分かれる。

第一部「王朝文化の性と身体—『源氏物語』とその前史」は、まず『源氏物語』の批評的想像力の源泉を明らかにすべく、性と身体に関する表象を、『源氏』以前の物語や和歌・歌謡、さらに神話や儀礼、説話等々に至るまで広く探査し、それによって得られた知見をもとに『源氏物語』を分析する。すなわち、性的な表象が希薄で死と引き換えに光源氏の子を出産した葵の上、少女の頃からその身体的表象のうちに豊かな官能性を湛えていながらついに光源氏の子を生むことがなかった紫の上、エロティックな催馬楽の引用とともに登場しながら本人はその性的表象をまったく欠落させた空蝉、女性性の規範を奇矯なまでに逸脱する末摘花、さらには両性具有的な光源氏といったように、この物語が〈産む性〉としての女性性やその文化的規範を根源的に相対化している様相を明らかにしている。

第二部「生誕の王朝文化史—〈家〉と〈子〉の儀礼」は、王朝物語の内に、10世紀における〈家〉の成立と、双系社会から中世的家父長制社会への移行という歴史社会的コンテクストを透視しつつ、藤原道長の肝煎りで盛大に行なわれた一条天皇の愛猫の産養という奇妙な行事や、『九暦』逸文に見える憲平親王産養の記録などを丹念に分析して、摂関制下の産養の政治性を明らかにする一方、物語における産養や裳着等々の儀礼には、『落窪』や『うつほ』においてすでに、物語が真に語ろうとしている人間関係を反映させるように選択的に描き分けてゆく方法が取られていることを明らかにし、そのような方法が『源氏物語』においてさらに深化している様相を精緻に読み解いている。

第三部「〈王朝〉の中世的変容と日本文化論への視座」は、家父長的原理が強化されてゆく中世にあっても、『とりかへばや』や『有明の別れ』のような物語が女性性の規範を相対化しえた力の源泉として『源氏物語』を捉え直し、三島由紀夫のみやび論をはじめ今日一般に流布している「みやび」の通念の表層的な一面性を明らかにして、王朝文化を真に捉え直してゆくための今後の研究のあり方を展望している。

やや論の粗い所も指摘されたが、関連する日本史研究の近年の成果をも丹念に取り入れた、「王朝文化史論」の副題にふさわしい包括的な労作であり、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。